

## 日本労働年鑑 1951年版(第23集)

The Labour Year Book of Japan 1951

## 第一部 労働者状態

## 第六編 農家の状態と農民の生活

## 第二章 農業労働力

## 第一節 農家人口

四七年八月一日臨時農業センサスの結果によれば、農家総人口は三六、五〇九、四五八人で、この内から出稼世帯員五九三、三七四人をのぞけば、常任世帯員は三五、九一六、一一一人である。前年四月の人口調査による農家人口三四、一三七、二七二人にくらべて二、三七二、一二七人(六・八%)の増加をしめしている。この期間に農家数の増加率は三・七%であるのに、農家人口のそれは六・八%であるから、平均一戸当り人口は六・〇人から六・二人へと増加している。これは戦後のぼう大な人口の農村への還流と都市への人口流出の停滞によつて生じていることはうたがいない。すなわち復員・引揚・疎開者の流入にかかわらず、都市産業の雇用の減少で農村の自然増人口の排出が停滞していることがその基本的原因である。(次項を参照)これが農村における「相対的過剰人口」となつて農民の家計を圧迫し、資本主義産業の要求する低賃銀労働力の維持に役立つことはもちろんである。四六年四月から四七年八月までに二百三十七万余人の人口増大が記録されたのち、この傾向は今日にいたるまで停止していない。

日本労働年鑑 第23集／1951年版

発行 1951年1月1日

編著 法政大学大原社会問題研究所

発行所 時事通信社

2000年2月15日公開開始

■ ←前のページ 日本労働年鑑 1951年版(第23集)【目次】 次のページ → ■  
日本労働年鑑【総合案内】

法政大学大原社会問題研究所(<http://oisr.org>)